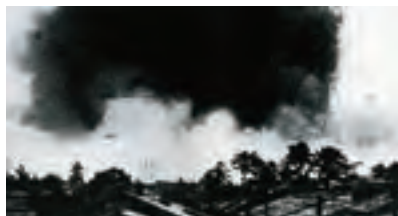


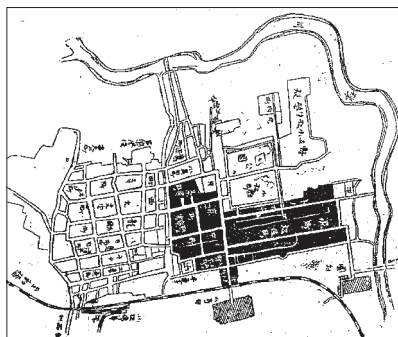
小松の大火と復興



炎々と燃え盛る小松町。橋北(川北)の大火状況
(小松市立博物館提供)



焼け残ったのは土蔵のみ。鎮火後、嬉しさのあまり蔵の扉を開け、二次災害を受けた例もある(昭和5年3月29日付北國新聞)



橋北の大火による焼失区域の地図(昭和5年3月29日付北國新聞)

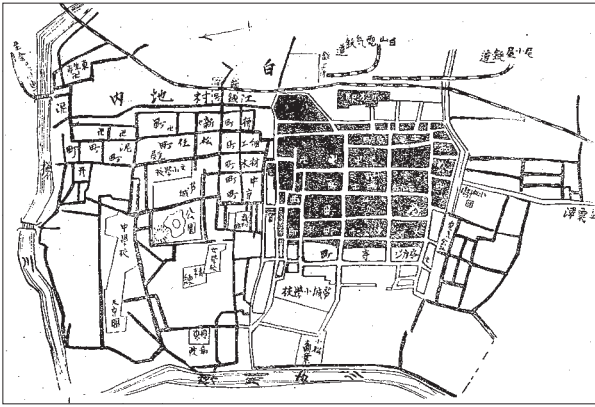
昭和五年(一九三〇)三月二十九日付の北國新聞第一報に「二八日午前三時半頃、中町遠慶寺と京町小松警察署との間より出火し、折からの南西の烈風(フェーン現象)に煽られて、火は忽ち四方に延焼した。中町より京町、材木町・細工町・横町を甜め尽し、三百数十戸を焼き、小松郵便局も危険になっている」と、第二報では、「更に松任

町・新町等に延焼し、火勢は殿町・泥町までに延焼、八町に及び八五〇棟、焼失面積六万五〇〇〇坪、一〇時にようやく鎮火した」と、いわゆる橋北の大火を伝えている。金沢・大聖寺よりの消防隊の消火活動も水利の便の悪さのため、効果ある消火ができなかった。僅かに、九童橋川と公園の溜池の水を利用するより他ならなかったことが、

猛火を喰い止めることができなかったとする。芦城公園にバラックを建てて、罹災者を収容、芦城小学校や小松中学校・

小松高等女学校も避難箇所になった。この復興に道路を拡張する等の都市計画を実施することになっている(小松町に上水道が完成するのは、橋南大火後の昭和十二年になってからである。それでも取付率は低かった)。

昭和七年十月二十三日の北國新聞夕刊は、「又も小松町の大火」という見出しをつけ、「千百廿戸を鳥有。二万五千坪焦土と化す、火元は大文字町の蘆城館」と記し、「罹災者六千名、工兵の手で破壊、九時間後に漸く鎮火、全滅は六カ町而も悉く商業の中心地(中略)全半焼千百廿戸」と、強風下でのすさまじさを報じている。この時の様子を罹災した龍助町の伊勢謙吉氏は、『大火見舞貫物控』という長帳に、大火記録を記している。表紙に「昭和



橋南の大火により延焼した地域を示す地図(昭和7年10月23日付北國新聞夕刊)



橋南の大火のすさまじさ。今も大文字町曳山保存蔵の内側柱や勝円寺(大領町)の山門に炭化した跡が生々しく残る(小松市立博物館提供)

七年十月二十一日午前一時半出火、午後二時十分類焼ス」とある。これは、旧市街地中央の九竜橋川の南地域、いわゆる橋南の大火の様子である。

【復興祭】

天災・人災あわせて、昭和初期の小松町は二度にわたる大火で甚大な被害を体験した。昭和九年の板

津地区の大洪水もあり、水と火攻めにあった。しかし、町民の力は強く、復興に向けて、国・県よりの復興資金(二五三万円)を借り入れ、ピンチをチャンスに切り替えた。この復興への努力が、昭和十年六月四、五、六日の復興祭となってあらわれた。四日は祭典と祝賀会が稚松校で、三〇余町の子供獅子の行列・芦城公園での踊り、小松劇場跡での寄合大相撲、夜の小松製作所工友会一〇〇〇人の仮装行列、芦城校での活動写真大会と日夜賑わった。五日は児童生徒による二九〇〇人の旗行列、芦城公園利常像前での第一回商工



二度の大火後、防災を含めた市街道路拡張図(湯浅治男氏所蔵) 龍助町上口から本折町にかけて直線で道路の新設が線引きされている

祭・紅白の布で飾られた牛車は小松特産品を満載しての行列、夜に入り一〇〇人による祝賀提灯行列で盛り上げた。六日は一年一二か月の仮装行列で大通りを練り歩いた。泥町(現大川町) 西照寺付近では築山芝居が上演された。五日一万人を超えた小松駅の乗客数、駅前には大アーチも造られ、町民一体となり、次への躍進を自覚した。復興祭費八九八〇円の町の出資もあり、官民あげて結集した。龍助町では、従来三間の国道を六間にする区画整理を了承していく(前述伊勢氏留書)。

(山前圭佑)



復興祭の広告塔(小松市立博物館提供) 人の最も集まる小松駅前の特設された看板